慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	堀江正規著 日本の労働者階級
Sub Title	
Author	黒川, 俊雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.6 (1962. 6) ,p.613(85)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620601-0085
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上はイギリス独占資本主義史研究についてのすぐれた研究である本書を読んで感じた精一杯の疑問であり、著者のいわんとするところを把握することができず、思わぬ誤解をしているかもしれない。もしそうだとすれば御寛恕を請う以外にはないが、ついでにもう一言いわせてもらうと、イギリスにおける産業独占が、他国に比しておくれたという事実はわかるけれども、それでもこれと新帝国主義とをはっきり離して論じている点が少し気になる。新帝国主義の形成の過程で、産業の独占化の傾向がみられた、あるいは並行しておこなわれた面もあったと思う。著者ものべておられるように、「新帝国主義」の性格は、「独占資本主義」の性格の外的側面にほかならないのである（一四二頁）とすれば、やはりこの両者を楯の両面としてみる努力が、今少し必要であったと思う。

なお項末なことで甚だ恐縮であるが、筆者が気のついた限りにおいて、ミス・プリントを指摘させて戴くものである。六三頁の一五行目、「数一〇〇万ポンドの金」というのも「数百万ポンドの金」とすべきであろう。また一二五頁の一一行目、「植民地民」というよりは、「植民地人」という方が一般的であると思うがどうであろうか。そのほか二一六頁の二行目、競走企業は競争企業が正しいし、二四一頁の一行目のイギリフはイギリス、二八二頁の九行目レビーはレヴィとした方がよいと思う。また二八三頁の一行目、クチンスキーは Kuzynski ではなく Kuczynski である。再版の折に改められることを期待するものである。おわりに、このユニークな研究の上に立って、筆者がさらに大きな課題、イギリス労働党の成立期の研究に邁進されんことを、同じテーマにとりくむ者として、心から希望するものである。（ミネルヴァ書房・昭和三七年二月刊・四六判・三五〇頁・五三〇円）

――一九六二・三・一一・深更――

新刊紹介

堀江正規著『日本の労働者階級』

従来、日本の労働者階級の現状を日本資本主義の生産方法および蓄積方法の特徴と結びつけて分析した書物はきわめて乏しかった。このことは、労働者階級の窮乏化法則が資本主義の蓄積過程からきりはなして論じられがちであったのに照応している。実際、「出稼型」のような賃労働の型、「企業別縦断的労働市場」のような労働市場の型、「年功序列賃金」のような賃金制度の型などにはめこむような分析が横行している。

その反面、日本資本主義を分析した書物は、たいてい、資本・独占資本、地主、国家権力などの面から、いわば「上から」分析したものが多く、労働者階級の状態についての分析には及ばないか、きわめて不十分な分析に終っているものが少くなかった。このことは、多くの経済学者が日本の労働者階級について全く不十分な理解しかもっていないことにもとづいている。

ところが本書は、日本資本主義の生産方法および蓄積方法の特徴にもとづいた労働者階級の状態分析であり、また、いわば「下から」の日本資本主義分析でもある。そういう意味で本書は劃期的なものであるといいうる。

著者は、「Ⅰ　労働者階級の歴史的地位」の中で、手短かに、マルクス・レーニン主義にもとづく、分析の視角を明らかにしている。そうして「Ⅱ　資本主義的生産の発展と労働者階級の物質的状態との関係」の中で、窮乏化法則とはどんなものであるかを理論的に解明した上で、「Ⅲ　日本における労働者階級の現状」で、与えられた統計資料を批判的に利用した分析の典型を示している。しかもこのような現状をもたらした日本資本主義の歴史的発展の特徴を「Ⅳ　低賃金と無権利の歴史的諸条件」の中で、要領よくまとめてから、この現状を克服しうる諸条件が成熟しつつあるにもかかわらず、日本の労働者が現状でいかにやりくりしているかを「Ⅴ　より高い生活様式のもとで、労働者階級はどう生きているのか」という章で指摘している。そうして最後に、現状を維持している戦後日本資本主義の特徴を、世界資本主義の現段階における矛盾の激化という条件のもとで、宿命論的にでなく、浮きぼりにしている。要するに、著者自身のべているように、本書の分析は、労働運動を捨象しており、それゆえ「実践の指針となりうるような具体性」をもって解決の道を示してはいないが、読みごたえのある、最近まれにみるすぐれた労働問題研究書であることはまちがいない。（岩波新書・二〇二頁・一三〇円）

―黒川俊雄―

＊　＊　＊

リチャード・パイプス編　気賀健三・和田敏雄訳『ロシア・インテリゲンチア』

この本には、革命前のロシア・インテリゲンチアに関する論文二編と、現代のソビエト・インテリゲンチアに関するもの三編、インテリゲンチアとは何かの論文一編、計六編